

「なぜアメリカの大学生は勉強するのか？」 —「契約」の概念に基づく勉強させるためのシステム

テンプル大学ジャパンキャンパス
アカデミック・アドバイジング・センター(教務部)
島田 敬久

2013年2月19日

於: テンプル大学ジャパンキャンパス 310教室

本日の内容

1. なぜ今アメリカモデルなのか
2. 学生を机に向かわせる「システム」の存在
3. Q & A

1. なぜ今アメリカモデルなのか

① トロウの大学モデル: 進学率50%の壁

② 全入化の意味とは

- ユニバーサル・ステージの影響
- キャンパスにおける「新世代」
- 全入化=学力低下なのか

全入時代における大学コミュニティ内共通言語としての 「システム」

- I. アメリカ的シラバス考
- II. そもそもGPAとは何なのか – 意味と活用法
- III. カリキュラムの工程表: ナンバリング・システム
- IV. 専門職としてのアカデミック・アドバイザー

I. シラバスとは？

「講義要綱」「授業要綱」??

教員・学生間の「相互契約書」

科目の目標、授業内容と展開法、勉強法、
勉強量、成績評価基準などをあらかじめ明示する

- インフォームド・コンセント(教員→学生)
- 教員評価・授業評価基準(学生→教員)

I. シラバスの内容とは？

- I. 教員に関する情報(氏名、連絡先、オフィスアワーなど)
- II. コースに関する情報(科目の最終目標、内容と展開法など)
- III. 成績評価に関する情報(各課題の成績評価に占めるウエイト)
- IV. 知的財産に関する情報(録音、録画に関する各教員のポリシー)
- V. 使用テキスト、その他の課題図書に関する情報
- VI. 進行スケジュール
- VII. その他あらかじめ明記しておくべきこと(剽窃、学習障害など)

資料I, II, III

II. GPAとは？

Grade Point Average の略

- A-Fの成績に応じてポイント換算し、履修済総単位数で割ったもの
- 総履修登録単位数=取得済単位数ではないことに注意！

【Grade Point (1単位あたり)】

A = 4.00

B- = 2.67

D+ = 1.33

A- = 3.67

C+ = 2.33

D = 1.00

B+ = 3.33

C = 2.00

D- = 0.67

B = 3.00

C- = 1.67

F = 0.00

II. 計算法

一科目あたりの計算: Grade Point × 単位数

例) 3単位科目がAだった場合

4.00 Grade Point × 3単位 = 12 Grade Point

総合GPAの計算: 総合Grade Point ÷ A-Fの履修済総単位数

例) 科目1(3単位):A、科目2(3単位):C、科目3(3単位):F

4.00 Grade Point × 3単位 = 12 Grade Point

2.00 Grade Point × 3単位 = 6 Grade Point

0.00 Grade Point × 3単位 = 0 Grade Point / 総合18 G.P.

18 Grade Point ÷ 9単位 = 2.00 GPA

GPAの計算法: Fを母数から省いてはいけない!!

Fを母数に入れた場合

科目1 / A (3単位): $4.00 \times 3\text{単位} = 12 \text{ GP}$

科目2 / C (3単位): $3.00 \times 3\text{単位} = 6 \text{ GP}$

科目3 / F (3単位): $0.00 \times 3\text{単位} = 0 \text{ GP}$

18 Grade Point $\div 9\text{単位} = 2.00 \text{ GPA}$

Fを計算から省いた場合

科目1 / A (3単位): $4.00 \times 3\text{単位} = 12 \text{ GP}$

科目2 / C (3単位): $3.00 \times 3\text{単位} = 6 \text{ GP}$

科目3 / F (3単位): $0.00 \times 3\text{単位} = 0 \text{ GP}$

18 Grade Point $\div 6\text{単位} = 3.00 \text{ GPA}$

- Fを省くと総履修単位数に対する相対的数値が算出されない
- ・GPAが学習習慣、学習量に対する反省材料にならない
 - ・「捨て科目」がなくなる＝施設の有効活用に繋がらない

II. GPAの活用法

学生に対する効果

1. 学習方法・態度への自己反省材料
2. 的確な履修計画の立案

教育/学位の「質保証」

1. 卒業認定
2. 成績不振者のサポート
3. 強制退学その他の措置 (Academic Standing)

その他

1. 奨学金
2. インターンシップ、リサーチ、セメスターキャップ制度 など

III. カリキュラムの視覚化: コース・ナンバリング

- 各科目にレベル(1年次~4年次レベル)に応じて背番号を振り分ける
 - 本学の場合:
 - 0700 – 0799 大学準備(レメディアル)科目
 - 0800 – 0899: 一般教養科目
 - 1000 – 1999: 一年次レベル (例: 国際政治入門 Political Science 1301)
 - 2000 – 2999: 二年次レベル (例: 社会科学統計演習 Political Science 2503)
 - 3000 – 3999: 三年次レベル (例: 国家主義と民族、政治 Political Science 3201)
 - 4000 – 4999: 四年次レベル (例: ライティングセミナー Political Science 4896)
- * 各科目ごとに割り当てられる4ケタの番号は固定

【目的】

- カリキュラム構成を視覚化することで学位取得までの到達度を明確にする
- 各セメスターの科目の組合わせを難易度の観点から検討する
- 求められる学習到達度を事前に予測する
- 大学間の単位の互換性を担保する

III. コース・ナンバリング

ニューヨーク州立大学ビンガムトン校の場合(公立総合大学)

- 100 – 199: 入門レベル (Introductory Level)
- 200 – 299: 中級レベル (Intermediate Level)
- 300 – 399: 中級レベル (Intermediate Level)
- 400 – 499: 上級レベル (Advanced Level)

(出典: SUNY Binghamton Bulletin)

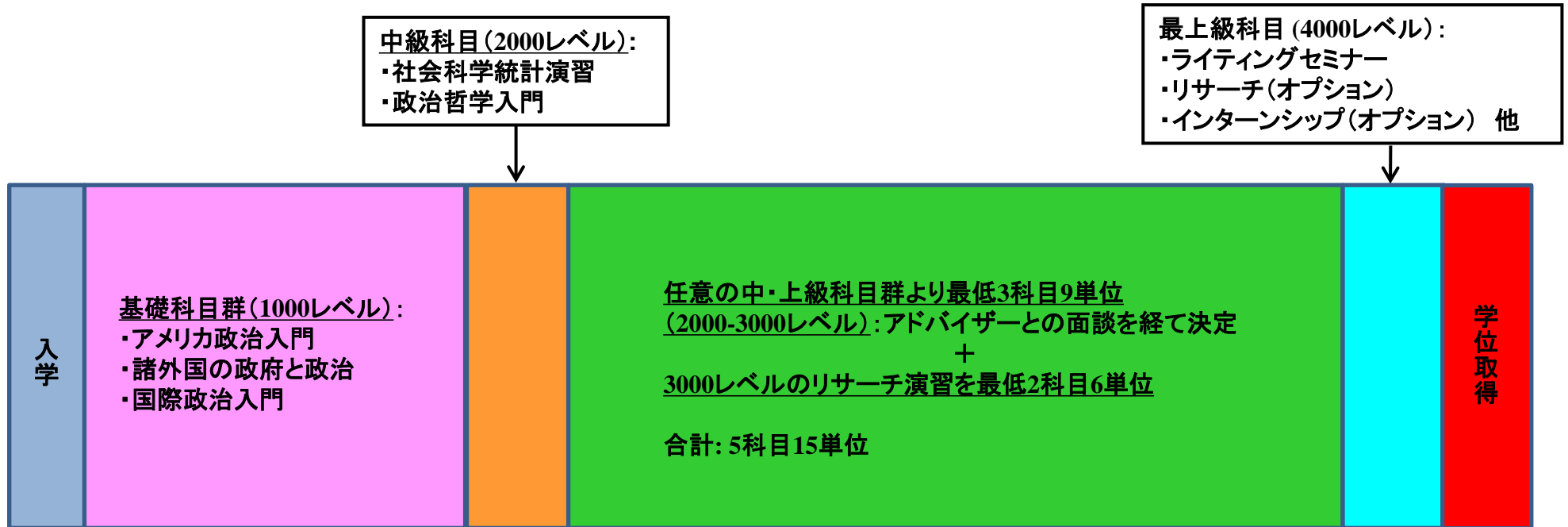
コーネル大学の場合(私立総合大学)

- 1000 – 1099: 準備レベル、卒業要件カウント不可 (Non-degree Applicable)
- 1100 – 1199: 入門レベル(全学年対象、Introductory Level)
- 2000 – 2999: 初級・中級レベル (1、2年次対象、Lower-Division)
- 3000 – 3999: 中級・上級レベル (3、4年次対象、Upper-Division)
- 4000 – 4999: 上級レベル (4年次、大学院生対象、Upper-Division)

(出典: Cornell University Courses of Study)

III. コース・ナンバリングによる卒業までのロードマップ

例) 本学政治学科(教養学部)



履修している科目の番号によって学位取得までの到達度が一目瞭然となるので、学生、アドバイザーともに学習計画が立てやすい

GPAとコース・ナンバリングの目的を達成するためには？

完全セメスター制の導入が必須

- ✓ コースナンバーにより、セメスター毎の科目の組合せと履修登録数を難易度の観点から検討できる。
- ✓ 履修登録を年に複数回行うことによって、1度失敗しても再挑戦が可能となる
- ✓ セメスター毎のGPA (Semester GPA)と総合GPA (Cumulative GPA)を各セメスター後に算出することで、学力の推移をモニターする

(例)	セメスター1	セメスター2	セメスター3	セメスター4
	08xx (3単位)	08xx (3単位)	2xxx (3単位)	3xxx (3単位)
	08xx (3単位)	1xxx (3単位)	2xxx (3単位)	3xxx (3単位)
	08xx (3単位)	1xxx (3単位)	3xxx (3単位)	4xxx (3単位)
	1xxx (3単位)	2xxx (3単位)	3xxx (3単位)	インターンシップ
	1xxx (3単位)	2xxx (3単位)		(3単位/140時間)

※ 中・上級コースが増えたので、履修登録数を減らした

※ 上級コースに加え、インターンシップも追加したので履修登録数をさらに抑えた

学生とアドバイザーはコースのレベルと期待される習熟度に加え、学生の過去の成績やGPA、得意(不得意)分野などを考慮しながら履修プランを立てていく

IV. 専門職アカデミック・アドバイザーとは

アメリカの現状

1998年発表、Wesley Habrey (ACT)の調査

教員アドバイザー (Faculty Advisor)のみの支援モデル

35% (1980年)  **28% (1997年)**

専門職アドバイザー (Professional Advisor)を採用した支援モデル

24% (1980年)  **73% (1997年)**

**** 全入化に伴い学生支援に特化した職員の存在が不可欠となった****

アドバイザーの果たす役割

– 大学のニーズは日米共通

● 大学全入時代の影響

A) 在籍する学生の変化

- キャンパスにおける「新世代」
- 学生の多様化＝新たなニーズの発生
 - First Generation
 - Underprepared Students
 - Low-Motivated Students
 - Students with Disabilities

B) 大学が負うべき責務

- ドロップアウト – 大学の経営問題
 - アカデミック／非アカデミック系双方からのリテンション・アプローチ
- 最大の利害共有者に対する大学としてのサポート義務(アカウントビリティ)

アカデミック・アドバイザー

1. 大学のポリシー・カリキュラムの「エキスパート」
2. 学生と大学各部門を繋ぐ「ハブ」／「コーディネーター」

アカデミック・アドバイジング・センター

1. 修学支援への特化
2. リテンションへの貢献
3. 一元的なデータ管理、解析
4. 大学経営陣への諮問機関としての役割
5. 教員や他の管理・運営部門への支援

専門職アカデミック・アドバイザーのメリット、デメリット ～教員アドバイザー (Faculty Advisor) との比較から

【メリット1】

学生からのアプローチが容易：恒常的なアクセシビリティ

- キャンパス開構日は原則全学生が立ち寄れる
- アドバイザーとのアポイントメントも原則無制限
(1学期で何度でも)
- 「必要なときにすぐ会える」安心感

教員アドバイザーの場合：

- アクセシビリティの低さ
- オフィスアワーはアドバイジングだけのものではない
- ティーチングやリサーチとのバランス

専門職アカデミック・アドバイザーのメリット、デメリット ～教員アドバイザー (Faculty Advisor) との比較から

【メリット2】

アドバイザーとしての資質の担保、SD実施の容易性

- コミュニケーション能力
- 関連学位
- アカデミック・ポリシーや他の支援部署に関する知識
- ポリシーやカリキュラム変更への迅速な対応

教員アドバイザーの場合:

- 優秀な教員＝優秀なアドバイザー??
- ポリシーやカリキュラム変更への対応の遅さ
(アドバイザーによる情報のブレの可能性)

専門職アカデミック・アドバイザーのメリット、デメリット ～教員アドバイザー (Faculty Advisor) との比較から

【メリット3】

修学支援に関する集中的オペレーション

- 他の部署とのコラボレーション
- アドバイジング・センターを中心とした「車輪の軸」モデル

【メリット4】

教員から独立した中立的立場からの提言が可能

- 大学経営と修学支援をふまえたニュートラルな視点

【メリット5】

学生情報の一元管理

- データ解析が容易
- 学生のニーズを汲み取った支援策の打ち出し

専門職アカデミック・アドバイザーのメリット、デメリット ～教員アドバイザー (Faculty Advisor) との比較から

【教員アドバイザーのメリット】

- 専門領域に関する知識
- 各科目内容に関する知識
- 授業外で学生との信頼関係を構築できる
- 大学院進学やキャリア構築を見据えた助言

【専門職アドバイザーのデメリット】

- ティーチング経験の欠如
- SDと人員配置計画の恒常的实施: ランニングコスト

専門職アドバイザーが必要な理由とは？

- ❖ 専門職アドバイザー vs 教員アドバイザーの図式は当てはまらない
 - 芸術系、工学系、自然科学系などは特に教員の関係性が重要
 - 大学院進学を目指す学生にとって教員アドバイザーは心強い味方となる
 - アドバイジング・センターが一次的イニシアティブをとり、教員アドバイザーを二次的資源としてニーズに応じた柔軟性のある支援システムを構築する

- ❖ 専門職アドバイザーの存在は教員支援である
 - 教員の最優先業務は教育と研究
 - オフィス・アワーはアドバイジングだけのものではない
 - アドバイジング・センターの存在によって、教員は教育と研究により多くの時間を労力を割くことができる

- ❖ アドバイジング・センターは大学全体に貢献できる
 - アカデミック・アドバイザーは学生のニーズを汲み取る最適のポジション
 - ポリシーやカリキュラムのエキスパート
 - 一元化されたデータ管理で、大学経営陣他の求めにより即時的な情報提供が可能
 - 大学経営陣へのポリシー／カリキュラム、学生サポートの双方の観点からの提言
 - 熟達したアドバイジング・センターは「アカデミック・リソース・センター」として、学生支援と教育活動における重要なシンクタンクとしての役割を果たす

総括

- 学生は大学の「顧客」なのか？
 - 「顧客」とは対価を支払って「望む品物」を「購入する」者
 - 学生の学費は何にする対価なのか？
- 「契約の概念」: 大学の責任、学生の責任
- 責任の所在を明らかにするためのシステム

参考Webサイト:

- テンプル大学ジャパンキャンパス アカデミック・アドバイジング・センター:
www.tuj.ac.jp/undergrad/academic_advising
- Cornell University Courses of Study: <http://courses.cornell.edu>
- National Academic Advising Association: <http://www.nacada.ksu.edu>
- SUNY Binghamton Bulletin: <http://www.binghamton.edu:8080/exist8/rest/index.html>

参考/引用文献:

- 荻谷剛彦 1992,「アメリカの大学・ニッポンの大学 – TA・シラバス・授業評価」玉川大学出版部
- 諸星裕 2010,「大学破綻 – 合併、身売り、倒産の内幕」角川書店
- Braskamp, Larry A. and Ory, John C. 1994, *Assessing Faculty Work: Enhancing Individual and Institutional Performance*, San Francisco, CA: Jossey-Bass Inc., Publishers.
- Habley, Wesley R. and McClanahan, Randy 2004, *What Works in Student Retention – All Survey Colleges*, Iowa City, IA: ACT.
- Habley, Wesley R. and Morales, Ricardo H. 1998, *Current Practice in Academic Advising: Final Report on ACT's Fifth National Survey of Academic Advising*, Manhattan, KA: National Academic Advising Association.
- Reinarz, Alice G. 2000, “Delivering Academic Advising,” Gordon, Virginia N., Habley, Wesley R. eds., *Academic Advising: A Comprehensive Handbook*, San Francisco, CA: Jossey-Bass Inc., Publishers.